

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地元の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として国土交通大臣が委嘱した方です。



Yoshiaki Yano

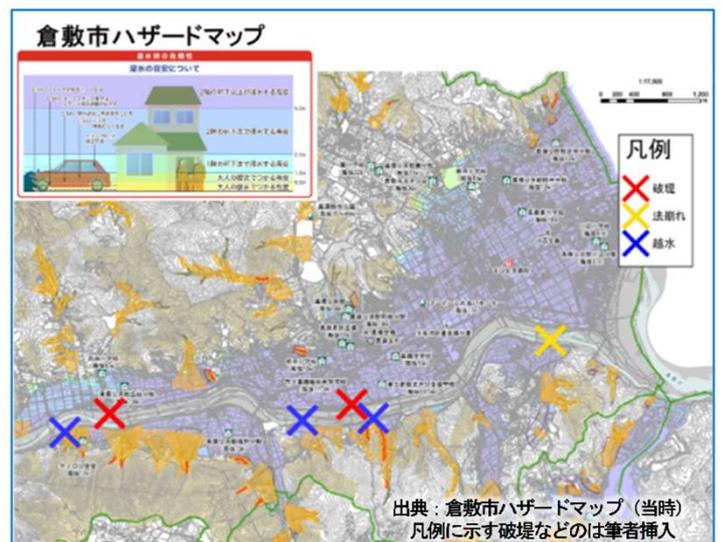
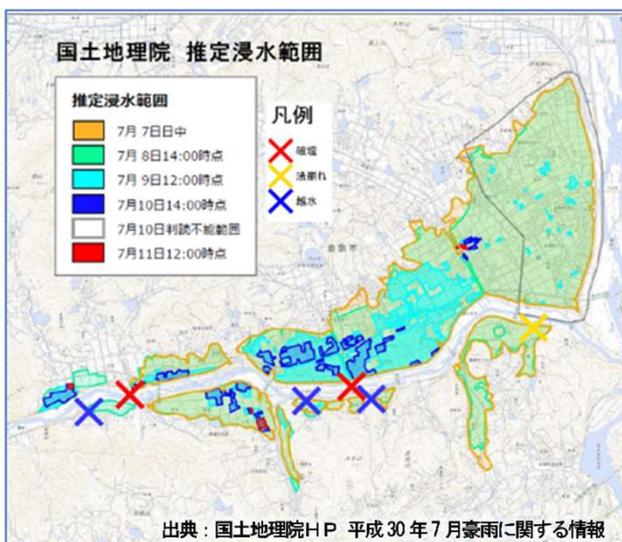
気象災害にどう備える？ 最後の判断は？

今年は戦後80年。この間に起きた大きな気象災害といえば、1959年9月に東海地方を中心に暴風、豪雨、そして特に高潮によって甚大な被害をもたらした“伊勢湾台風”でしょう。死者・行方不明者は全国で5,098人にも達し、戦後最大の気象災害とされています。この災害を契機に国の防災対策が本格的に始まり、“災害対策基本法”の制定へとつながりました。

伊勢湾台風が防災対策の契機となったのは言うまでもありませんが、葛飾区民に深い影響を与えたのが1947年9月のカスリーン台風です。利根川の決壊によって区内のほぼ全域が浸水する甚大な洪水被害が発生しています。気候学者などは、地球温暖化に伴い、今後の豪雨はより頻繁により極端になると警告しています。実際、近年の雨の降り方や線状降水帯の発生、また豪雨災害の報道から、これまでとは異なってきていると感じさせられることがあります。私たちは「葛飾区水害ハザードマップ解説編」などに示される浸水想定区域図を再確認し、備えを怠らないことが重要です。葛飾区としても、繰り返し対策を見直し、防災訓練を積み重ねるとともに、区ホームページや広報かつしか、毎年実施しているハザードマップ説明会などを通じて、想定される被害やその対策などについて区民への周知を図ってきているところです。

近年の洪水災害の中で、特に心に残るのは2018年7月の“西日本豪雨（平成30年7月豪雨）”です。この豪雨では、台風を除く豪雨災害としては戦後最多の271人が犠牲となり、35年ぶりに死者が100人を超えました。なかでも岡山県倉敷市真備町では51人が亡くなり、このうち42人が1階部分で犠牲となり、65歳以上の高齢者が36人を占めました。

私は豪雨発生から17日後の7月24日、ようやく



住民の皆さまが落ち着きを取り戻しつつある頃に現地を訪れました。猛暑の中、水に浸かった家財など廃棄のための搬出を終え、消毒や乾燥作業を繰り返し続けられているところでした。居室などがひとたび浸水すると、再び生活できる状態に戻すには、3～4週間も必要となることを実感しました。

また、浸水範囲は事前に公表されていた洪水の「ハザードマップ」とほぼ一致しており、“浸水リスクが高いと示されていた場所で、実際に大きな被害が発生している」という現実を目の当たりにしました。

この“西日本豪雨”の発生を踏まえ、国の中央防災会議は、水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループを設置、避難対策の強化に向けた検討を様々な視点から進め、今後実施すべき対策などをとりまとめた報告書を作成しています。この報告書の結びには、国民一人ひとりが主体的に行動しなければ命を守ることは難しい。行政には避難対策の強化を求めるが、加えて国民の皆様につきのことを強く求めるとあり、「国民の皆様へ ～大切な命が失われる前に～」という強いメッセージが添えられています。

当時、災害発生時の対応について考えを整理しきれていなかった私にとって、「最後は自分の判断で命を守る」という防災の原点を、明確に示してくれるものでした。

避難指示などを受けて速やかに避難することは重要です。自然災害は予測不可能な部分も多く、最終的には各自が状況に応じて判断し行動することが、命を守るためには不可欠だと思います。

皆さまは、このメッセージをどのように受け止められるでしょうか。

<国民の皆さんへ ～大事な命が失われる前に～>

- ・ 自然災害は、決して他人ごとではありません。「あなた」や「あなたの家族」の命に関わる問題です。
- ・ 気象現象は今後更に激甚化し、いつ、どこで災害が発生してもおかしくありません。
- ・ 行政が一人ひとりの状況に応じた避難情報を出すことは不可能です。自然の脅威が間近に迫っているとき、行政が一人ひとりを助けに行くことはできません。
- ・ 行政は万能ではありません。皆さんの命を行政に委ねないでください。
- ・ 避難するかしないか、最後は「あなた」の判断です。皆さんの命は皆さん自身で守ってください。
- ・ まだ大丈夫だろうと思って亡くなった方がいたかもしれません。河川の氾濫や土砂災害が発生してからではもう手遅れです。「今、逃げなければ、自分や大事な人の命が失われる」との意識を忘れないでください。
- ・ 命を失わないために、災害に関心を持ってください。
 - あなたの家は洪水や土砂災害等の危険性は全くないですか？
 - 危険が迫ってきたとき、どのような情報を利用し、どこへ、どうやって逃げますか？
- ・ 「あなた」一人ではありません。避難の呼びかけ、一人では避難が難しい方の援助など、地域の皆さんで助け合いましょう。行政も、全力で、皆さんや地域をサポートします。

出典：平成30年7月豪雨を踏まえた水害・土砂災害からの避難のあり方について（報告）平成30年12月 中央防災会議 防災対策実行会議 平成30年7月豪雨による水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループ